

令和4年6月13日

高月先生、ありがとうございました さようなら

あの文書を書いてから18年が経つのですね。そうすると高月先生と最後にお会いできたのも18年前ということになります。

駒場小学校、的場中学校、東高校、教育大学、そして、教員になって38年、全てを何とか終えて、一昨年退職。幸せな教員生活を送ることができたと思います。

私が、英語を好きになったのも、英語の教員免許を取ったのも、中学校の英語の先生を7年勤めることができたのも、全て高月先生のもとで、英語を学んだからです。

高月先生のもとへは、小学校6年生から高校3年生まで通いました。最初の2年間は、高月先生のお父さんの大先生に習い、大先生が亡くなってからはずっと高月先生でした。

若くてさっそうとして、仕事から帰って来てすぐに教室に来て、英語を教えてくださいました。時間のある時は、キャッチボールなどをしたことも覚えています。

高校に入ると、それまでのアットホームムードから、頭が半端なく良い仲間がいっぱい入って来て、毎日が受験に向けての戦闘モードになりました。英語が得意だった私でも、ついていくのがゆるくなくなり、落ちこぼれ状態でした。それでも、「朗君、大丈夫。志望校に入れるように応援するから。」といつも最後まで残って課題をやっていく私に、温かく声をかけて下さいました。

大学に入って、免許に英語を選んだのも、高月先生のもとで学んだからです。大学を出ての就職は、小学校でした。渡島に戻る時「中学校でも構いませんか。」と問われ、当時の恵山町で英語の教員を7年間勤めました。その時に、生徒に英検を進める中、「それじゃあ、自分も。」ということで、がんばって勉強して取った準二級は私の宝物でもあります。その後小学校へ戻りましたが、中学校に勤めることができたということは、いろんなことで役に立ちました。

昨今、小学校での外国語活動が盛んになり、私はそれほど英語ができるわけではありませんでしたが、英語の免許を持っている小学校の先生ということで、その推進にも携わることができ、ゲームを考えたり、ジェスチャー遊びを考えたり、ごっこ遊びを考えたり、とても楽しかったです。

今、61歳になり、教育とは離れた世界にいます。でも私の人生で英語が身近であったことは間違いありません。私の人生をそして教員生活を豊かにして下さった高月先生、本当にありがとうございました。先生から学んだ数多くの知識や英語への思いを大切に教員として過ごしてきました。今、グローバル社会の中、日本人としても英語を身に付けることは、ますます大切になってきました。これからも、高月先生からの教えを胸に、多くの次世代の若者たちに英語のすばらしさを伝えていきたいし、そのことは先生への恩返しにもなるのではないかと思います。大好きな、そしていつもすてきな高月先

生、ありがとうございました。

佐々木 朗

---

と書いた文を 18 年前に私が書いた「高月先生との再会」のメッセージと一緒にお通夜に持って行きました。息子さん、娘さんに、生まれるずっと前の大先生との勉強、若き高月先生の様子などを伝えることも、親のすばらしさを知ることであり、先生の供養になると思ったからです。

五稜郭の赤坂斎場は、私の両親もお世話になった所でとても親切なところでした。ちょっと懐かしい気持ちもあって向かいました。ものすごい数の教え子や門下生が来ていると思っていました。ところが駐車場がぎりぎりに行った割に空いていて、「あれれ」と思いながら、中へ向かいました。

そうすると、「娘です。」と言ってくださったので、「思い出を書いたのであとで、時間があったら読んでみてください。」と手紙を渡しました。なんか、「あつ。」という表情をしていらしたように思ったのですが、もちろん私は初対面なので、誰か知っている人と勘違いしているのかなあとと思って受付をすませました。

通夜は本当にこぢんまりとしていて、親族も入れて10名程度でした。「あらら、私みたいな部外者が来るところではなかったかなと思いました、とつてもとつてもお世話になった高月先生なので、席につきました。もちろん通夜に出るつもりで行ったのですが。

祭壇の中央に先生の遺影が飾られ、英語の辞書、そして、サイドには 2 年前の敬老会の写真が飾られていました。遺影は何となく面影があるなあという程度で、普通のおじいちゃんの写真でした。でも私の頭には、30半ばのちょっといい男の高月先生のちょっとこつとした顔そのものでした。

まもなく式が始まったのですが、司会の方が、私の所に来て、「お名前あきらさんでよろしいでしょうか。」と尋ねて来ました。「娘さんが是非この手紙を式の中で読ませてくださいということですので、よろしいでしょうか。」こんな風にでまで扱ってもらえるなど全く予想しなかったことであり、いつものように読み直しさえしなかったことでドキドキしました。

読経の後、ここで、「高月先生に長い間英語を習った佐々木先生のお手紙を読ませさせていただきます。」と始まりました。それも、18年前の私が大学院に通っていた時にだらだら書いた手紙から始まりました。そして、今日の手紙も読んでくださりました。何か申し訳ない位、お手紙タイムになってしまいました。何か聞きながら涙ぐんでいる人もいて、いいことをしたのかなあ、ちょっとでしゃばっちゃったかなあなど思いながら、自分が書いた手紙を読むのを聞いて、ちょっと私も涙が出そうになりました。

小学校6年生の大先生の時から、先生の目の前の左側の通路側の席、そこの7年座っていたなあなど思いを馳せました。友達が入って来て、また、時には去っていき、ま

た高校生からは、がらっと変わった勉強まっしぐらの生活。人は出入りしたけれど、私の席は、ずっと同じ。教育大に決まって、最後にその席とお別れしたのも、そして、先生や先生のお母様にご挨拶して、教室の門を最後にしたのも、ついこの間のようにお思われましたが、もう40年以上前のことです。今は、ちょっとジャングル状態になりましたが、何年かに一度通り、私の青春時代にずっと通った教室があるのを見て、先生のことを思い出していました。

通夜が終わると、息子さん、娘さんがすぐに私の所に来て、お礼を言ってくださりながら、先生との思い出を伝えました。そうしたら、みんな周りの人が、自分たちの方に注目しているんです。恥ずかしかったですが、行って良かったし、高月門下生の一人としていいご供養はできたかなと思います。

お坊さんのお話にもありましたが、命あるものは、必ず死を迎えます。誰でもがいつか死を迎えるわけですが、命ある間に、「教え」を残せるということは素晴らしいなあと思いました。先生からいただいたたくさんの「教え」のおかげで教員を楽しく全うできました。そして、私もさらに、微力ながら次の世代に生きる子どもたちに英語の重要性、英語が通じた嬉しさを伝えることができたと思っております。教員という仕事を選ぶことができたこと、それに向けて応援してくれた先生に感謝します。

先生は、認知症を患っていたということを知りました。そんな中、娘さんが偶然見つけた私の書いた「高月先生との再会」というメッセージ。それを施設に入っている先生に読んであげたところ、「朗君か。」と覚えていてくださったそうです。何千人もいる教え子の中で、最後まで私の事を覚えていてくださったことに感謝しながら、高校時代は落ちこぼれのびりっけつだったけれど、英語教育に携わることができ、英語の楽しさを次の世代に伝えることができたことは、ちょっとは優秀な弟子だったのかなあなどとくすぐったく思いました。ここで玄関での娘さんのちょっと驚いたような表情の意味が分かりました。

一つの時代が終わり、また一つの次の時代に命が受け継がれていきます。それぞれが持つ、知識、技能、そして、優しさ、思いやり、勇気、など人間としての正しい生き方をきちんと、そして確実にバトンタッチしていくことが、今生きている私たちの使命だと思います。

立派になられた息子様、娘様の益々のご活躍、そして、高月家の発展、そして、私達高月門下生の益々の社会での活躍を願い、式場を後にしました。